

令和6年度

歴史講座 報告録

令和6年度の歴史講座は、全3回にわたり様々な視点から歴史を学びました。各回を担当して下さった講師の先生方に大網白里市の歴史について触れていただき、郷土史の理解が深まる内容となりました。

本紙にて、当日の様子を簡単にご紹介します。

作成者：大網白里市図書室

作成日：令和7年3月21日（金）



講座の前半では、文化財・博物館・学芸員の3つの視点から歴史との関わり方や楽しみ方について学び、後半は、明治29年から昭和47年まで大網の玄関口として活躍した旧大網駅について、現代に残る遺構や古写真から歴史を見ていきました。

また、市内に残る戦争遺跡として「日立航空機大網地下工場跡」に関する説明もあり、戦時下に作られた地下工場の全体像について地図を見ながら考察した他、「宮谷八幡宮本殿」など市内に残る文化財等についても、山武・長生郡地域の類似の事例と比較しながら、地域の歴史・文化財について学びました。

山武・長生地域の歴史と文化財

2024.11.2



講師
久野 一郎 先生
(御宿町月の沙漠記念館 館長)

江戸幕府の旗本たち

東洋大学講師派遣事業 共催

2024.11.28



講師
白川部 達夫 先生
(東洋大学名誉教授)

江戸時代、大名以外の將軍直臣の中で公的に將軍への謁見が許される資格を持つ身分の者は旗本と呼ばれ、幕臣として家格や知行高等に応じた責務を果たしていたそうです。

講義の中では、一三〇〇石の知行高を持つ三島家の事例を中心に、旗本の住む屋敷の構造、知行地や収入、軍役などについても学びました。

また、本市に関連する事項について、寛文8年の永田村（市内永田）は、本多四郎左衛門、石来織部、大道寺孫太郎の3名の旗本を領主とする相給村落であったとの説明がありました。幕府の統治政策として、一つの村を複数の領主に統治させた例は、関東に多く見られるようです。

戦国時代の房総半島に存在した様々な勢力について年表や地図を用いた丁寧な解説があり、当時の複雑な情勢に加え、小西原氏はどうのような存在であったか、そして土気・東金酒井氏の動向などについても学びました。

なお、両酒井氏については現存する史料や伝承等だけでは不明確な事も多くあり、その祖として知られる酒井定隆（清伝）についてさえ歴史学の観点で明らかとすべき事柄は未だ残されているようです。

史料から歴史を調査し、事実として認定する作業は地道で大変な一方で、その面白さを感じる講義でした。

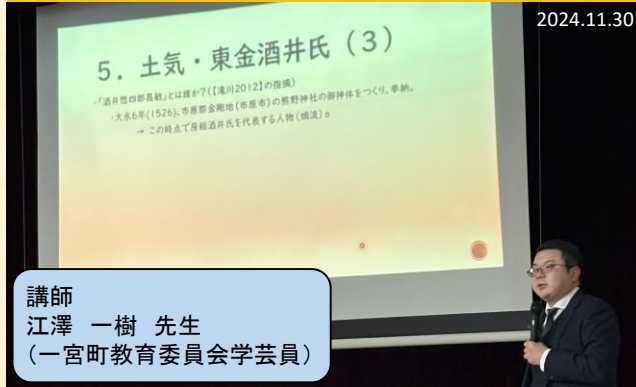


斎藤巻石の作品

東上総の戦乱と国衆たち

-土気・東金酒井氏、小西原氏の戦国時代-

2024.11.30



講師
江澤 一樹 先生
(一宮町教育委員会学芸員)

歴史講座に合わせて、斎藤巻石(1798-1874)の描いた作品を図書室ロビーにて展示しました。江戸時代の斎藤家は、九十九里を代表する大網主(大規模な地曳網経営者)で、そのルーツは土気酒井氏の家臣であると伝わります。巻石は伝統的な南画山水を得意とする画家としても有名で、「いわし文化」の代表的な担い手の一人として多くの文人墨客とも交流を持ちました。